



ひょうご人権ジャーナル

KIZUNA

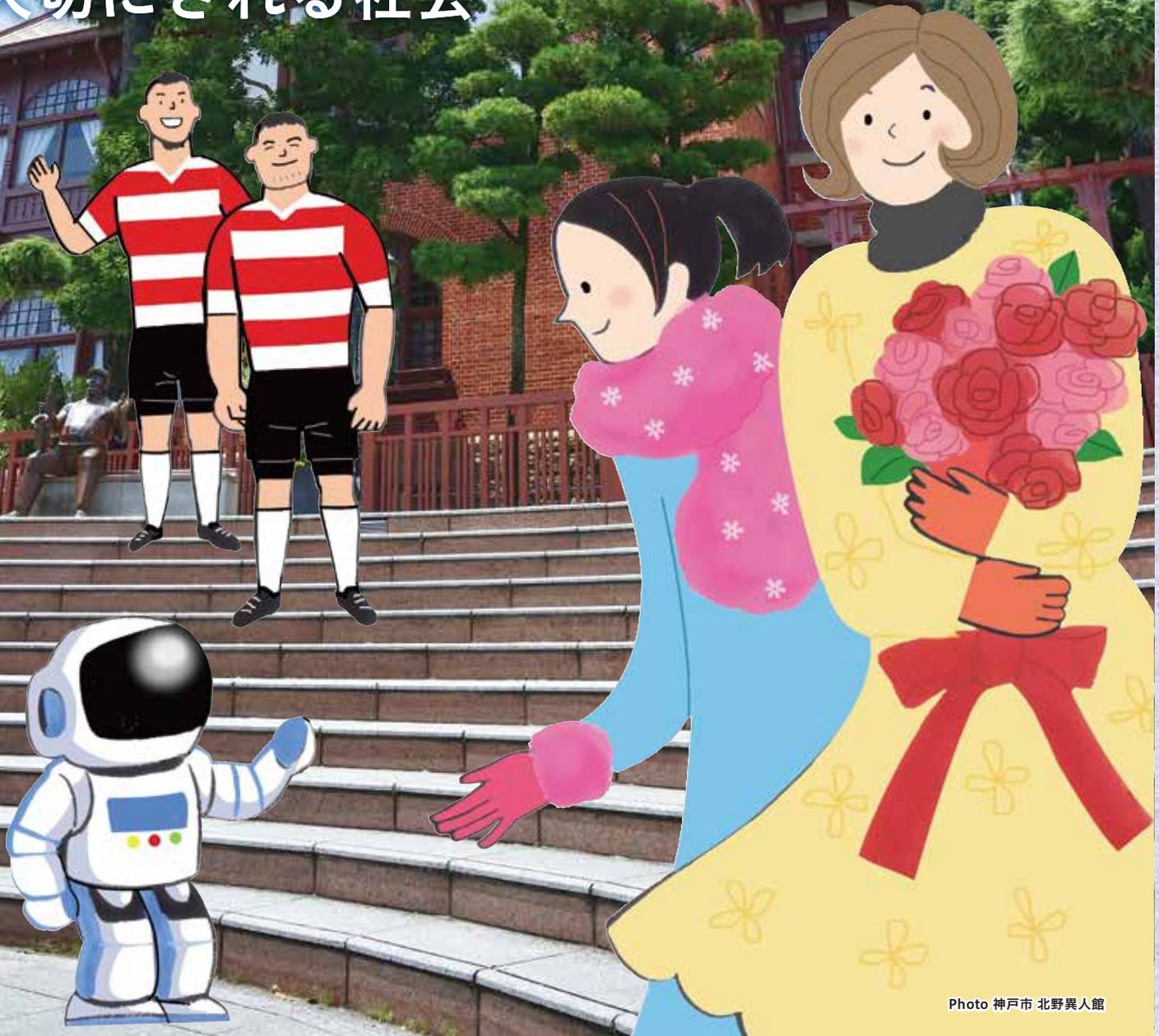
# きずな

特集 **社会と人権**

## 自分らしさが 大切にされる社会

INDEX

- ② 自分を信じる力が未来を拓く！  
大畑 大介さん(元ラグビー日本代表)
- ③ 人工知能の進歩は人権を支える  
大森 隆司さん(玉川大学工学部・脳科学研究所 教授)
- ④ 「自然は性の多様性を認めているが、それを否定しているのは人間社会だ」  
武田 丈さん(関西学院大学人間福祉学部 教授)
- ⑤ LGBTも働きやすい職場をつくろう  
村木 真紀さん(特例認定NPO法人虹色ダイバーシティ 代表)
- ⑥ 拉致問題の早期解決を願って  
～拉致問題を考える講演会とコンサートの集い～
- ⑦ ふれあいサロン
- ⑧ 情報ぷらざ



人権の尊重が社会の文化として定着するためには、私たち一人ひとりが身の回りの出来事を人権の視点からとらえ、自らのものとして意識し、日常の行動に結び付けていくことが大切です。本号では、誰もがお互いを認め合い、助け合いながら、いつでも主体的に地域や社会で活躍できる社会づくりについて、スポーツや科学技術分野等の観点から考えてみましょう。

この人に  
聞く!

自分を信じる力が  
未来を拓く!

元ラグビー日本代表

おおはた だいすけ  
大畑 大介 さん

元ラグビー日本代表としてW杯に2度出場し、日本ラグビー界を牽引してきた大畑さん。2011(平成23)年の引退後は、ラグビーの普及や人材育成に取り組み一方、2019年に日本で開催されるラグビーW杯のアンバサダー(大使)として精力的に活動中です。

Profile

大阪市出身。東海大学付属仰星高等学校、京都産業大学を経て1998(平成10)年神戸製鋼入社。日本代表としてW杯に2度出場。日本人史上2人目のワールドラグビー殿堂入りを果たす。現在は、スポーツを通じた人材育成や2019年に日本で開催されるラグビーW杯を成功させるべく、メディアや講演等で精力的に活動中。著書に「信じる力」(KKベストセラーズ)、「トライ」(PHP研究所)等。



ラグビーとの出会いは

小学校3年生からラグビーを始めました。幼少期は自分の感情をなかなか表現できず、友達とのかわりも苦手で、けれどもみんなから一目置かれる存在になりたいと思っていました。ラグビーは、父親が学生時代にやっていたこともあったので、人と同じことができない私は友達みんながやっていた野球ではなく、ラグビーを選びました。足の速さには自信がありました。ただ、それだけでチームのみんなが振り向いてくれて、プレー中は自分の感情を

素直に表現できませんでした。自分の居場所を見つけれられたと思いました。

ラグビーの魅力とは

ラグビーは足の速さや力の強さなど、それぞれの個性を活かせるとともに、互いの立場を理解、尊重しながら自分の役割を見つけ全うできるスポーツです。また、前に進むために後ろにいる仲間にもボールをつなぎます。場面に応じて、仲間の立場を考え、ボールを託し、託されると言うプレーは、自分を犠牲にして仲間を生かすとともに自分も生きることでもあり、信頼関係があつてこそ成り立つスポーツです。

現役時代に心掛けていたことは

常にベストの状態です。試合に臨むため、ストレスを溜めないことやコンディションを整えることを心掛けていました。自分自身は心が弱い人間だと思っているので、言い訳したり逃げたりしないように、自分に厳しくしていました。「なりたいたい自分」のイメージを明確に持ち、その自分に少しでも近づくため努力を重ね、実現してきました。

引退後スポーツ界の発展に力を注ぐ  
思いは

自分の後に続く選手は皆、後輩だ

と思っています。後輩は先輩の背中を見て成長するので、自分のできることに取り組んで、先輩の生きる柱を広げたいと考えています。ラグビーがあつたからこそやってこれたことを多くの人に伝えたいのです。

大畑さんが考える「スポーツと人権」  
とは

ラグビーのボールは試合のアイテムの一つですが、トライ、勝利に向かつて仲間とつなぐボールは、まさに人の思いの集合体です。どのスポーツでも、それぞれが自分の個性を発揮し、チームにとってよりよい環境を作り出し、最高のパフォーマンスを作り上げる喜びがあります。スポーツを通して、互いを尊重し合い、共に成功や失敗を体験する中で「世の中で必要のない人間はいない」と感じられます。

今後の抱負は

まずは、多くの人にラグビーのおもしろさを知ってもらいたいです。そのため、2019年のW杯をしっかりとサポートしたいと思っています。「日本で開催してよかった」と思える大会にするため、アンバサダーとして情報発信をしていきたいです。

# 人工知能の進歩は人権を支える

玉川大学工学部・脳科学研究科教授

大森 隆司 さん  
おおもり たかし

最近の行動経済学の成果では、人は価値を最大化するよう行動するとされています。確かに、自分の日常を見ても、金銭にとらわれない多様な価値を考えて行動していることは間違いありません。ここから技術と人権の関係を考えましょう。

## 技術の進歩と人権

私たちは新しい技術・道具を喜んで導入します（一般的には、ですが）。それは、技術の進歩が新たな価値を生み出すからです。最近はやりの人工知能（AI）もその一つです。

AIの本質は大量のデータからの統計であり、それは機械であるがゆえに厳密でゆらぎがなく、結果としてデータが十分にある場合には人間を超える力を発揮しま

す。そのため、AIはこれまで人に行うこともできません。しかし、ものが統計であることから例外的な事象の判断には弱く、人が自らの仕事をサポートする道具として使うのはよいのですが、任せきることはできないものです。でもいずれAIはもっと高度化し、人とAIが共存、あるいは人がAIに多くを任せる社会がやってくるでしょう。そのとき、AIには人の価値観を共有してほしいと思います。生物としての人は本質的に、生存生殖・安心安全・愛着愛情・経済価値・自己実現など複数の価値の世界で生きています。これを追求する自由の保証こそ人権とよばれるものでしょう。AIには、この人の本質を理解して、人を支援する道具であってほしいと思います。

## AIが人を支える社会とは

その一つの実践として私たちは、保育を支援するAIを研究しています。保育の期間（3歳〜6歳）は、人の個性が大きく育ちます。例えば、好奇心、自発性、自己抑制、自己理解、社会性、リーダーシップなどが、この時期にメキメキ成長します。生きる力を持つ人は、他者を尊重し、社会共有の価値を認識し、社会において役に立つ一員になると期待されます。保育期の環境を整



えることは、社会を支える人々の育成につながります。

しかし現時点では、「生きる力」がよりよく育つ人的・物的環境とはどんなものか、科学的なデータはほぼ皆無です。これを、人間の直観の限界を超えたAIのデータ分析をもつて解明し、さらにAIを使って保育者を支援する。それが私たちの目指すAIが人を支える社会のひとつの姿です。

※最近では「非認知能力」と呼ばれることもあり、多くの本が出版されています。

## Profile

東京大学工学研究科修了。工学博士。東京農工大学工学部、北海道大学大学院工学研究科を経て、2006（平成18）年より現職。脳に知能が宿る情報的なメカニズムに興味があり、認知科学・人工知能・認知発達・神経科学などと関わる一方で、最近では研究で関わった保育の重要性を認識し、人工知能技術の保育領域への適用を探っている。



# 「自然は性の多様性を認めているが、それを否定しているのは人間社会だ」

関西学院大学人間福祉学部 教授

武田 文さん



## 多様なセクシュアリティ

13人に1人いるとも言われる性的マイノリティの人たち。こうした人たちを表す言葉「LGBT」(Lesbian(女性同性愛者)、Gay(男性同性愛者)、Bisexual(両性愛者)、Transgender(頭文字)を耳にしたことがある方も多いのではないのでしょうか。しかし、セクシュアリティの多様性は必ずしもはっきりとLGBTの4種類に分かれるものではなく、Questioning(自身の性自認や性的指向が定まっていない人たちなど)も含めた「LGBTQ+」や、性的指向(Sexual Orientation)と性自認(Gender Identity)はLGBTのような性的マイノリティに限らずすべての人に関わる概念であるとして「SOGI」という用語も、最近では使われるようになってきました。

## 自然界では当たり前前の多様性

「自然は性の多様性を認めているが、それを否定しているのは人間社会だ」というのは、ハワイ大学の有名な性科学者ミルトン・ダイアモンドの言葉です。たとえば、ある種の動物は気温で性別が変わるそうです。また、映画『フィンディング・ニモ』のモデルであるカクレクマノミという魚は小さいうちは雄ですが、群れでもっとも大きいものが雌に、次に大きいものが雄になるそうです。そして、その雌が死ぬと、2番目に大きかった雄が今度は雌になるそうです。

## 性的指向・性自認のマイノリティの人たちへの人権侵害

このように、自然界では当たり前前のセクシュアリティの多様性が、人間社会では受け入れられず、偏見や

## 差別につながっています。宝塚大学の日高庸晴教授の調査では、「性的マイノリティの約6割が学校でいじめにあっていること」(2016年)や「日本のゲイとバイセクシュアルの男性は、そうではない男性の約6倍もの自殺未遂経験者がいること」(2001年)などが明らかになっています。また、関西学院大学の調査(2015年)でも、性的マイノリティの学生のうち「教員から性別、性的指向、性自認を嘲笑されるような言動を自分が経験したり、見聞きしたことがある」と答えた人が2割以上、「学生から受けたことがある」のは6割以上となっています。こうした状況もあって、関西学院大学ではキャンパス内のセクシュアリティの多様性尊重を訴えるため、2013(平成25)年度より毎年5月にキャンパス内のセクシュアリティの

多様性尊重を訴える「関学レインボーウィーク」を開催しています。

「くん・さん」づけのような性別に基づく呼称など、私たちの何気ない言動や態度が、時には性的マイノリティの人たちを傷つけてしまうのです。私たち一人ひとりが正しい知識を身につけることが、多様性尊重にむけての第一歩だと思っています。

## Profile

米国テネシー大学大学院修了、Ph.D.。専門は多文化・国際ソーシャルワーク。米国の難民支援、インドの識字教育、フィリピンの移住労働者、日本国内の外国人支援や多文化共生をテーマに当事者たちと協働する調査研究に従事。2010(平成22)年より現職。2013(平成25)年からは関西学院大学人権教育研究室において、関学レインボーウィークを担当。

# LGBTも働きやすい職場をつくろう

特別認定NPO法人  
虹色ダイバーシティ代表

むらきまき  
村木真紀さん

## 職場におけるLGBTの現状

日本では、職場においてカミングアウトしているLGBT（レズビアン、ゲイ、バイセクシュアル、トランスジェンダー）などの性的マイノリティは、ほとんどいない状況です。これは、職場でもLGBTをからかうような言動や、男らしさ、女らしさに関して決めつけるような発言が日常的にあり、カミングアウトしにくい状況にあるからです。

しかし、私たちのアンケート調査によると、職場で差別的言動があることが、人間関係の悪化や勤続意欲の低下に繋がっています。同性パートナーは福利厚生で家族として扱われないため、育児や介護の問題が出てきたときに、離職を余儀なくされることもあります。職場の差別的言動や居心地悪さが要因となり、転職を繰り返したり、メンタルヘルスを悪化させたり、貧困状態に陥ったりする人もいます。

## 企業や行政の取り組み

LGBTも働きやすい職場づくりのため、企業や行政が取り組みを始めています。

大手企業では、性的指向（好きになる相手の性別）や性自認（自分の認識する性別）で差別してはならないという規定を独自に作成し、福利厚生の対象として同性パートナーを認め、現場の意識を変えるためにLGBTに関する研修をしています。

行政は、LGBTに関する相談窓口を設けたり、採用において差別しないよう企業向けの公正採用研修を行ったりしています。男女雇用機会均等法のセクハラの規定にも性的指向と性自認が明記されました。

## ALLYになろう

私たちは、職場ではALLY（アライ）※の存在が重要だと考えています。当事者がカミングアウトする



ことが難しい状況の中、ALLYの人には、差別的言動にNOを言い、職場の環境改善を提言することを、お願いしたいと思っています。人口の数のパーセントだと言われているLGBTですが、声を出しにくいマイノリティであっても働きやすい職場、誰もが自分のアイデンティティに関して嫌な思いをしないで働くことができる職場は、みんなにとって働きやすい職場になると信じています。

※英語で同盟者の意味。LGBTの問題を自分ごととして捉え、一緒に解決に向けて動く人のことを指す。

## Profile

茨城県生まれ。社会保険労務士。京都大学総合人間学部卒業。日系大手製造業、外資系コンサルティング会社等を経て2013(平成25)年より現職。性的マイノリティ当事者としての実感とコンサルタントとしての経験を活かして、LGBTと職場に関する調査、講演活動を行う。共著に「職場のLGBT読本」(実務教育出版)、「トランスジェンダーと職場環境ハンドブック」(日本能率協会マネジメントセンター)等。

平成30年度  
のじぎく文芸賞  
作品集が完成しました

文芸作品を通して、県民の皆さんに人権について考えていただくため、兵庫県と当協会が毎年公募する「のじぎく文芸賞」。今年度は、1584編の作品の応募がありました。このたび、最優秀賞4編、優秀賞8編を収録した作品集が完成しました。図書館や市役所等の公共施設、県立のじぎく会館などで閲覧することができます。また、協会ホームページでもご覧いただけます。

ぜひ、人権について考えるきっかけにいただければと思います。

【問い合わせ先】

(公財)兵庫県人権啓発協会

啓発・研究部

TEL 078(242)5355

FAX 078(242)5360



# きずな TOPIC

拉致問題の  
解決に向けて

## 拉致問題の早期解決を願って 〜拉致問題を考える講演会とコンサートの集い〜 (神戸市)

拉致問題発生から40年を過ぎて

毎年12月10日から16日は「北朝鮮人権侵害問題啓発週間」です。1970年代から80年代にかけて、北朝鮮当局による日本人拉致事件が多発しました。政府が認定している拉致被害者17人のうち、兵庫県関係者は有本恵子さん、田中実さんの2人です。そのほか、北朝鮮による拉致の可能性を排除できない行方不明者(特定失踪者)も数多くおられます。2002(平成14)年9月に北朝鮮は初めて日本人拉致を認め、同年10月に蓮池薫さんをはじめとする5人の拉致被害者が帰国しました。

拉致は夢や絆を奪う

昨年12月22日、神戸市で全国人権擁護委員連合会、法務省、兵庫県等が主催する「拉致問題を考える講演会とコンサートの集い」が開催されました。

壇上に立った蓮池薫さんは、「拉致されてからは思想教育をされ、自由は一切なく、北朝鮮当局に言われるままに生きるしかなかった。夢を奪われ、家族との絆を断たれた。拉致は命以外のすべてを奪い去るもの」と24年に及んだ拉致被害の苦難を語り、問題の解決を強く訴えました。

また、神戸市出身の拉致被害者有本恵子さんの両親も登壇し、「娘が拉致されて35年目を迎え、他の被害者家族も高齢になっている。拉致問題は多くの方の支援を受けているがなかなか前進しない。元気づけに早く子どもに会いたい」と家族の悲痛な思いを訴えました。

拉致問題への理解を深める

拉致問題は国民の生命と安全に関わる重大な人権侵害問題です。すでに40年以上の年月が経ち、一刻も早く解決しなければならぬ問題です。私たち一人ひとりが、拉致問題を「風化させない」「忘れない」という強い思いをもち、拉致問題についての関心を高め、理解を深めていくことが大切です。



拉致問題の早期解決に向けて講演した蓮池薫さん

### きずな図書館

## クマと少年

著者/あべ弘士 発行所/ブロンズ新社



著者のあべさんは、北海道の旭山動物園で25年間飼育係として動物たちと付き合った経験から、生き物のいのちと真摯に向き合う絵本作品を多く生み出しています。この作品は、作者がアイヌの集落(コタン)の近くで生まれ育ち、アイヌのおばばから聞いた、アイヌの人々の自然に対する考え方や動物たちとの暮らしを題材にしています。

少年と子グマのキムルンは、おかあさんのおっぱいを一緒に飲んで、きょうだいのように育ちます。キムルンは大きくなり、クマを神の国にかえすイオマンテの儀式が近づきます。ところがキムルンは森へ逃げ出してしまいます。8年が経ち、ふたりは森で再会し、少年はキムルンの思いを知ります。

この作品には、アイヌの人々が大切にしていきたいのちの尊厳、自然への畏怖と感謝などが込められており、読み終わった後に、いのちの大きさを感じられる一冊です。

# 投稿&クロスワードで 「オリジナルリラックス ツボ押し」 をプレゼント!



**問** A~Jの文字を順番に並べると、  
何という言葉になるでしょう?

1	2	3	4	5	G
6	H		7	J	8
9	D		10	C	11
		12	E	13	
14		B	A		15
F			16	17	
18				19	I

## タテのカギ

- 東京オリンピック・〇〇〇〇〇〇〇〇はいよいよ来年ですね
- 赤十字国際委員会の本部があるヨーロッパの国
- 金メダルを取るのには実力ナンバー〇〇の選手です
- アメリカ・カナダ・オーストラリア等の通貨の単位
- 他人にわからないように気をそらせたり細工をしたりして不思議なことをして見せる芸。まずはトランプを使ってやってみましょう
- 節分の招福の行事に欠かせない魚
- 細かいところに神経が行き届かず雑で荒っぽいぞんざいな様子
- デジタル化についていけない人は「〇〇〇〇人間」と呼ばれます
- みんなで一緒に物事のまねをして遊びます。「鬼〇〇〇」、「電車〇〇〇」
- 木片を積み重ねていろいろなものの形を作る遊び
- 病気が治った後の経過

## ヨコのカギ

- 情報社会のセキュリティの要となるものです。他人に知られないよう十分注意しましょう
- 兵庫県中部に位置し、生野銀山や竹田城跡などで知られている市
- 線のことです。「人生のスタート〇〇〇〇に立つ」
- よく似ていること。「〇〇〇品にご用心」
- 枝をとびまわり木の実などを食べる姿がかわいい小動物
- 落花生、南京豆とも言います
- 鳥獣を生け捕りにするとき〇〇を仕掛けます
- 節分の次の日は立春。〇〇〇の上ではもう春ですね
- 「〇〇〇〇もよろしく」と真心を込めてお願いします
- 話す言葉の調子や勢い。「〇〇を強める」

## 12月号の答え ノリコエテイクチカラ

### 読者からのお便り~12月号を読んで~

障害のある人が障害を感じずに過ごせるようにするためには、お互いのちょっとした思いやりが大切だなと思いました。権利を主張することも大事ですが、なんでもかんでも行政に頼ってはいけません。だから、障害のある人のことをもっともっと知っていく必要があると思いました。  
(神戸市 クニちゃんさん)

共に生きる社会のために、学校でも、いろいろな学習や活動に取り組んでいます。パラスポーツにふれる活動もどんどん取り入れたいと思います。  
(赤穂市 匿名希望)

クロスワードの正解者(抽選で10名)に、「オリジナルリラックスツボ押し」をプレゼント。本誌「きずな」へのご意見やご感想、人々とのふれあいを通した心温まるエピソードなどを募集しています。どしどしご投稿、ご応募ください。



※投稿掲載時はペンネームの使用も可能です。  
※当選者の発表は、賞品の発送をもって代えさせていただきます。

### 応募方法

はがきか、FAX、Eメールで受け付け。クロスワードの答え、郵便番号・住所、名前(ペンネームを使用の場合も要併記)、電話番号、年齢、職業、本誌へのご意見・ご感想を明記の上、ご応募ください。

### 締め切り

2月28日(木)締め切り(必着)

### 応募先

〒650-0003  
神戸市中央区山本通4-22-15  
県立のじぎく会館内  
(公財)兵庫県人権啓発協会  
「きずな」ふれあいサロン係  
TEL 078(242)5355  
FAX 078(242)5360  
Eメール info@hyogo-jinken.or.jp

※応募者および投稿者の個人情報は、管理を適切に行い、誌面づくり以外の目的には利用いたしません。

## 平成30年度「人権のつどい」を開催

昨年12月5日(水)に平成30年度「人権のつどい」を開催しました。この行事は人権週間(12月4日～10日)にちなみ「人権文化をすすめる県民運動」を一層推進するために毎年行っているものです。この日、兵庫県公館に約430人が集い、人権について考えました。

「のじぎく文芸賞」の表彰式に始まり、日本初のアカベラグループとして活躍中の「チキンガーリックステーキ」による、楽器では出せない5人の声のハーモニーが会場に広がりました。講演では、公益財団法人人権教育啓発推進センター理事長の横田洋三さんが登壇されました。「人権をみんなのものにした人、エレノア・ルーズベルト」と題した講演は、世界人権宣言70周年にふさわしく、人権の大切さを私たちにわかりやすく伝えてくださいました。



横田洋三氏



チキンガーリックステーキ

### EVENT GUIDE

イベントガイド



**イベント名** 加古川市ウインターステージ

**日時** 2月16日(土)12:20～15:30

**場所** 加古川市人権文化センター大ホール

※JR加古川駅南口から神姫バス43または44系統乗車、「北備後」下車南へ約400m、「南備後」下車北へ約300m

**内容** 第1部(12:20～13:40) 人権文化センター登録団体発表会

第2部(14:00～15:30) 講演会

【演題】「差別」と「区別」～勘違いから生まれる差別～

【講師】桂 ぼんぼ娘さん(落語家)

※参加費無料 ※人権文化センターに電話または窓口へ直接申し込み

※応募多数の場合は抽選になります

**問い合わせ** 加古川市人権文化センター 教育・研修係

TEL 079(451)5029

※その他のイベント情報は、当協会ホームページ「研修会・イベント情報」をご覧ください。

ラジオ関西「谷五郎のこころにきくラジオ」(毎週月曜 10:00～15:00)で、14:35頃から「きずな」の記事等を紹介しています。

### HALF TIME



2018(平成30)年は、世界人権宣言70周年でした。そこで、改めて世界人権宣言を読み直してみました。

じっくり全文を読むと、「すべての人が生まれながらに基本的人権を持っていること」「だれもが幸せに生きるための権利を持っていること」がよくわかります。

世界を巻き込んだ大戦を経て、世界の平和を

現するために、各国が協力して人権を守っていかねばならないことを、世界人権宣言は示しました。

70年経った今、国際化や情報技術の発展・進化によって、社会が便利で快適になった一方で、まだまだ人権課題は山積しています。きずなを通して、「だれもが大切にされる社会」「人権文化があふれる社会」についてみなさんと一緒に考えていきたいと思えます。(西村)

